



TITLE:

はじめに

AUTHOR(S):

白山, 義久

---

CITATION:

白山, 義久. はじめに. 時計台対話集会 2008, 4

ISSUE DATE:

2008-08-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/176948>

RIGHT:

は  
じ  
め  
に

白山 義久

しろやま・よしひさ

京都大学フィールド科学教育研究センター長



第四回時計台対話集会のご報告をここに皆様にお届けいたします。すでに京都大学フィールド科学教育研究センターの年中行事として定着してきたこの集会ですが、ことしもたくさんの方々にご参加いただくことができ、成功裏に開催することができましたことを、大変喜んでおります。

今回のテーマは「むしに教わる森里海連環学」というものでした。昆虫は陸上生態系で大成功をおさめている分類群です。その多様性は少なくとも既知の種においては全生物の半分をしのぐものです。

これだけ多様性に富む「昆虫」ですが、残念ながらフィールド研はこの動物を専門とする教員はいません。動物の研究者は主に海の生物を研究しており、陸上の生態系を研究する教員の対象はほとんどが植物だからです。しかしこの動物が生態学的に重要な役割をもつことはだれでも認めるところです。「未来を拓く昆虫科学」が21世紀COE研究の課題となったとは当然といえましょう。その最新の

研究成果を今回は藤崎先生から伺うことができました。また「むし」は常に人々の身近にいますので、在野のセミプロがたくさんいらつしやいます。今回はその中から、とびきりのゲストとして養老孟司さんと村田泰隆さんに含著に富んだお話をしていただくことができました。そのほかに、尾池総長のご挨拶、スペシャルゲスト「ムラタセイサク君」の紹介、森里海連環学の進捗状況の報告、恒例の対話集会と盛り沢山の内容でしたが、どれも大変中身の濃いものだったと思います。

森里海連環学の創設を目指して、フィールド研が設立されてから早くも五年以上が経過しました。ひたすらに走り続けたこの間の様々な取り組みを振り返ってみると、「時計台対話集会」は社会貢献という面でその中で最も輝かしい成果であったと自負しております。これも天野礼子さまをはじめとして、フィールド研および農学研究科等事務部を中心とする教職員のみなさまのご協力にこの場を借りてあらためて御礼申し上げます。

いまだ黎明期にある森里海連環学ですが、今後もこの時計台対話集会を通して市民の皆様はその研究の進捗をご報告し、議論を深めていきたいと考えております。どうぞよろしくお願い致します。

